

「ものの見方・考え方」

今から7年前、私は岐阜市にある岐阜県美術館の学芸部に勤務していました。美術館では美術品の収集・保管、展示、調査研究等を担当していました。様々なそこでの仕事の一つに教育普及活動という業務がありました。これは美術館の魅力を広く県民の皆様を知っていただく広報とともに、美術を楽しみ親しんでいただける機会を設けて、一人でも多くの美術ファンを育てる活動です。ですから、学校や様々な団体等と連携して、鑑賞教室、ワークショップやイベントなどを開催する活動を展開していました。

ある時、美術館のバリアフリーの取り組みの中で、視覚に障がいのある方への美術鑑賞を実施しようという試みが始まりました。美術では視覚が大きな働きをします。むしろ視覚中心の芸術と言えるかもしれません。弱視の方なら多少は見えますが、全盲の方への美術鑑賞はどうすればよいのかなど、解決すべき課題は多くあります。

そこで視覚障がい者を支援している社会福祉法人からの助言を得て、手で直接美術品に触れることで美術鑑賞を行うことを計画しました。視覚に頼らない作品鑑賞です。そのための条件整備や準備はたくさんあります。通常、美術館で展示してある美術品に手を触れる事は、観覧者には一切できません。

まず、手で触れられる美術品を決め、その表面に錆や腐食を防ぐ化学処理を行いました。石彫や陶磁器には、手で直接触った鑑賞後の洗浄処理で対応します。点字のガイドブックも作成し、学芸員が作品解説を行う手順も決めました。

そしていよいよ視覚障がい者のための美術鑑賞会が開催されました。順調に皆さんが美術品に直接手を触れ、点字や拡大文字のガイドブックを読まれ、作品解説を聞き、主催者である私たちの思い通りに事は進んで行きました。しかし、私にとっては思いもかけない事態がそこで起こりました。ある意味では価値観・人生観が変わる出来事でした。

それは、ある年配の女性が彫刻作品に触れた自分の

手を鼻の前に持っていき、その臭いを嗅いで「金属の臭いですね」と言われたことです。私たち美術館職員は視覚障がいの方々への対応として、手で触る「触覚」と解説を聞く「聴覚」の二つがあれば、「視覚」を補って余りあるとの勝手なおごりがありました。

さらにその女性は、私が見ている前で自分の手のひらを舌でペロリと舐め、「苦くて酸っぱい味ね」とつぶやきました。まさに衝撃でした。美術の専門家と思い込んでいた自分が恥ずかしくなりました。

視覚に障がいを持っている人のほうが、自分の感覚を大切にして視覚というハンディを乗り越え、「触覚」「聴覚」「臭覚」「味覚」をフル動員して、全身全霊で美術鑑賞をしています。その真摯で誠実な鑑賞態度に頭が下がりました。「五感」があるがゆえに、気付かない、見えていない、理解できていない健常者といわれる我々の実態を思い知らされました。本当の障がいとは何なのか、考えさせられました。

この貴重な経験は、その後の私のものの見方、考え方に大きく影響しています。外見や思い込みで人を見ない。一つの価値観で物事を判断しない。広い視野や多くの視点を持つ。そして障がい者の方々の鋭い感性や心の豊かさ。これらは、全て自分自身への戒めです。



視覚障害の方の鑑賞場面

次の時代を担う役割の東高生諸君にも、このことはしっかりと伝えていきたいと思っています。

7月22日
大垣東高等学校
浅野裕司